

2012年度ゼミナール報告(2)

調査 研究事業

2012年度仏道探求ゼミ「維摩經」講読

斉藤 基 (一般)



講師:野村 懷忍氏
(高野山東京別院執事)

地上の権威を認めない野村僧侶のもと、「菩薩にして非道を行かば、仏道に通達す。」と説く維摩経を講読して2年ばかりが経ちました。そんな中で、仏教とは究極の平等思想なのかなぁと思うようになりました。般若心経で、受・想・行・識は、「無」であると唱えますが、鈴木大拙師の言うように「無」=「無限」ならば、受・想・行・識は、無限に存在するのだと考えられます。しかも、その受・想・行・識は、善悪・優劣・貴賤・男女の別なく存在価値が同じでなければならないというわけです。だって、維摩経は不二の法門を説いたのですから。肉体に縛られている存在の私たちが、この平等思想を意識しながら、互いに譲歩、依存しながら社会生活を営んでいくことができれば、もう少し平和な世界を実現できるのでしょうか……。さて、維摩経は2013年4月で読み終わってしまいます。次は華嚴経を講読する予定です。皆さんも参加してみませんか？

ユース企画 「大重潤一郎監督作品連続上映会」

『久高オデッセイ 第三部 風章』への期待高まる

浜田 浩之 (担当・会友)

「大重潤一郎監督作品連続上映会」は、東京自由大学の副理事長も務められている、大重監督の代表作『久高オデッセイ』をはじめとする8作品を2作品ずつ、全4回にわたって上映する企画。毎回、大重監督作品とつながりのあるゲストを迎える、充実した内容でスタートした。上映前後に、沖縄の大重監督と電話でつなぎ、会場の皆さんへの挨拶、作品に込めた思いや、「生きる豊かさだけでなく、死に勢いよく向かっていく豊かさを感じたい」など、新作『久高オデッセイ 第三部 風章』への意気込みを独特の声で語りかけた。「自然」「命」「見えないものを感じる」をテーマにした各作品は、上映後も好評で、観られる機会が少ない分、新鮮な驚きと共感をもって迎えられているように見えた。「スクリーンを通して命が語りかけてくる感触(縄文)」といった感想も寄せられた。ゲストは、第1回が、『黒神』のチーフ助監督、市東宏志さん。第2回は、大重監督と岩波映画時代から50年来の友人、映画監督の四宮鉄男さん。第3回は、『縄文』をはじめ、多くの大重監督作品の撮影を担当した、映画カメラマンの堀田泰寛さん。第4回は、『水の心』のカメラマン、川口徹也さん。アフタートークでは、約1時間、ゲストが、各作品の解説や時代背景、撮影時のエピソード、大重監督の近況などについて語った。会場の皆さんからは、様々な質問や感想が出され、少人数の上映会ならではの交流の場になった。上映会は、来年度もプログラムを充実させて継続し、『久高オデッセイ 第三部 風章』を盛り上げていきたいと思います。



第3回トークゲスト:
堀田 泰寛氏 (写真右)

調査 研究事業

「コロキウム・再生エネルギー展示会」

大木 健一郎 (担当)

太陽エネルギーを利用できる太陽光発電装置を開発する研究を行うための研究会として、自由大学にコロキウムが数年前から開始されましたが、2011年と2012年には再生エネルギー世界展示会にてコロキウムでの研究結果を発表しました。2年前からのコロキウム研究内容を社会に発表可能なホームページ(HP)を私が2012年5月から開設して、太陽エネルギー研究内容を綿々と書き綴りしています。このHPは、自由大学HP内のカリキュラム⇒ゼミナール内の「コロキウム」を開いて「オフィシャルHP行」をクリックすると現れるので、ご覧下さい。私のHPに2012年12月の第7回再生可能エネルギー展示会発表内容も追加されており、発表内容は「コロキウムで開発した非結像集光機を、世界開発のトラフ型大規模太陽熱発電装置に利用して低価格作製できる改造方法」でした。

事務局だより

井上 喜行(事務局長)・渡辺 恵実(事務局員)

今年度も無事、一年が終わります。講座や特別企画、合宿など、内容的には大変充実したものととなりました。ですが、事務所維持のため財政状況は苦しい状態です。事務局も経費の節減に努力しておりますが、会員の皆様、元会員の皆様、未だ会員でない皆様、2013年度も是非、東京自由大学を会員として支えていただきますよう、お願いいたします！ また、状況改善の良いアイデアをお寄せください。

●<http://homepage2.nifty.com/jiyudaigaku/>

●E-mail: jiyudaigaku@nifty.com

Newsletter Vol.20

2013年(平成24年)3月XX日発行

編集・発行 NPO法人東京自由大学 / 事務局 〒101-0035 千代田区神田紺屋町5 T.Mビル2F TEL&FAX: 03-3253-9870
デザイン (有)アンビエンス / 印刷 (株)ベクトル

ユース企画

「現代神道論」

志村 純 (担当)

2012年7月22日(土)、ユース企画「現代神道論」第4回「神田明神正式参拝と講演」が、神田明神にて開催された。神道・神社について、現場にふれることで理解をふかめようというのが主旨である。神田明神権宮司・清水祥彦氏にお話しいただいた。正式参拝は拝殿にて祝詞奏上、玉串拝礼ののち、鎌田東二先生が法螺貝・横笛・石笛を奉奏したのが心に残った。別棟の学習室に移り、まず清水氏のお話しの理解を深めるため志村がレジュメをくばり、神田明神の沿革を説明した。続いて、清水祥彦氏から講話を伺った。豊富な江戸時代の視覚資料を紹介しつつ、江戸期の地震・災害からの復興を祈念する意味が神田明神境内を描いた浮世絵に隠されていることを解き明かし、現代における震災からの復興の祈りと重ねて読んでいくなど、きわめて印象的であった。また、神田祭りにおいて、近隣の秋葉原文化を取り入れたお神輿をつくるなど、伝統を守るだけではなく、新しい取り組みにも積極的であること、東京自由大学との今後のコラボレーションの可能性も話題に上った。歴史を踏まえつつ、神田明神のみならず神社の現代社会におけるあり方を真摯に考察したお話で非常に示唆に富んだものであったと思う。

自主ゼミ

荘子読書会

海野 和二郎 (NPO法人東京自由大学学長)

『荘子』に関して、どの文献のどこにどういう奇想天外なストーリーが書いてあるか熟知している世界一の『荘子』研究者、木村真呂さんの話を聞きながら、この世界にまたとない奇書に親しみを持つ人は、ふるってこの自主ゼミにお出かけください。

自由ゼミ

空海茶話会第2弾「比叡山と鉄の妖怪たち」

富田 弘子 (講師・高野山大学密教研究会所属)



妖怪たちが誕生した史実は、あまり知られていない。

高野山とともに、平安仏教の揺籃の地とされる比叡山は、一つ目小僧、一本タラ、蛭尤、鉄鼠、牛頭天王など、産鉄と製鉄を物語る妖怪たちの宝庫であった。神が零落したものを妖怪ともいうが、それら妖怪になぞられた僧侶たちは、半僧半俗の山林修行者ではなく、元三大師良源やその弟子慈恩など、天台座主まで勤めた知行一致の高僧であったことは重要な視点である。

すなわち、信仰と技術と労働は三位一体の営為であり、呪術は技術と義勇であった。山林修行の聖地とされる霊山は、あらゆる鉱物を抱く宝の山であり、現世利益をかなえる密なる空間であった。とりわけ、比叡山は鉄と不可分の歴史を編んできたといえる。

自由ゼミ

「歌のことだま」

田村 郁子 (担当・会員)

一昨年の屋久島の夏合宿で数人で歌を唄っていた時、「日本の古い歌には言霊がある、歌い継いでいってば——」という海野先生からの言葉で始めたゼミでした。各回毎に季節に因んだ歌やリクエストの予守歌などを取り上げ、作者の生い立ちや詩や曲のできた背景、詩の意味など知る事によってより一層、その曲の素晴らしさがわかりました。皆、童心に帰り大きな声、美しい声で歌い、楽しみました。その後の話題も歌から世の中の変化にまで拡大し、沢山の気づきもあったかと思えます。最終回では、大学生の方のご賛同も得られ、後継して頂く事も決まり本当に嬉しいです。テレビのCMソングやカラオケ文化が名歌を駆逐してしまう時代に、あえて忘れ去られようとしている珠玉の名歌や童歌を歌い継いで行く事の意義は大きいと思います。また、私達大人から子どもへ、それこそ是非、肉声を通して歌い継いでゆくという、素敵な関係を作ってみませんか。

■編集後記

今年は宮沢賢治没後80周年を迎える。1999年に設立した東京自由大学の先達モデルの一つが「羅須地人協会」であった。芸術・宗教・科学の統一という未来からの霊性の風を受け、大きな志を抱いて小さな東京自由大学は歩んできた。2012年度後期の成果報告をお読みください。

岡野 恵美子 (運営委員長)

NPO法人 東京自由大学 Newsletter

2012.3.XX Vol.20

2012年度〈三省祭り〉

2012年10月28日(土)

鳥飼 美和子 (理事・運営委員長)

「言霊巡礼～ことば、いのち、自己への旅」

毎年、秋の恒例となった三省祭り。今年は4回目を迎えた。テーマは「言霊巡礼」。詩人であった山尾三省氏の「言葉」とはいかなるものであったか、長年待たれていた三省氏のインドやネパールへの旅の日記が、野草社から『インド・ネパール巡礼』として刊行され、屋久島に定住するまでの三省氏の魂の軌跡をたどることも出来るようになったこともあり、三省氏の全体像をいのちの旅から解き明かしてみようという試みでもあった。パネリストは昔からの友人であり、インド・ネパールへの旅の先人でもあった写真家の渡辺眸氏と、宮内勝典氏を介して山尾三省氏を知り、その創作世界を深く理解する文化人類学者の今福龍太氏。渡辺氏の協力により『三省と屋久島』の写真展も同時開催できた。

今福氏は、現在加速的に起こっている社会の状況をみると、三省氏の訴えていたことが、鋭い文明批評であったことを、ますます強く苦く感じざるを得ないことをまず指摘した。

三省氏の晩年のエッセイ『森羅万象の中へ』と『祈り』を携えつつ今福氏が主に語ったのは、森羅万象との親和力である。三省氏は屋久島の山へ、森へと分け入ったように、言葉の森へと分け入った。ことばは古くから言の葉といって植物として表現されている。そういう植物的なコスモスへ深く沈潜していった。森や山や海や、自然は無意識の森羅万象であり、言葉は自覚された森羅万象である。三省氏は「言葉(自覚)」と表現している。言葉はルーペや双眼鏡のように世界を違った様相で著すもの、その対象は自覚的に選んでいるようでもあり、あちら側から選ばれているのでもある。親和力が働く者同士が特別な関係を選びとって響き合う、それは自然界が持つ偶然性の原理でもある。

三省氏は、自然との交感について、たとえば具体的にはタツノミ草について語る。それは自然の「奥」や「裏」を語っていることである。今福氏も奄美自由大学で、ずっと「裏」を探っているとも言えるとのこと。そこからラフカディオ・ハーンが日本語の響きのもつ宇宙を感じていたこと、それは三省氏の感性にも連なることに言及された。

渡辺氏が三省氏と初めて会ったのは1975年ごろ、西萩窪のほびつと村の1階のレンガを貼る作業と一緒にしながら、インドやネパールの話をしたとのこと。インドやネパールへの旅は、渡辺氏の方が先であった。長年の友人である根底には、

2012年度ゼミナール報告(1)

ユース企画

「少子高齢化の未来図」

日渡 健介 (担当)

東京自由大学では、昨年の9月7日と9月28日にユース主催の特別企画「少子高齢社会の未来図」の第3回と第4回を行いました。第3回はベストセラー『デフレの正体』(角川loneテーマ新書)で著名な経済アナリスト薬谷浩介氏をお呼びして、人口減少が日本経済にもたらす変化とこれから時代を生きていくための戦略について話していただきました。つづく第4回は、地域再生やコミュニティ論で著名な広井良典氏(千葉大学教授)をお呼びして、これからの日本が作り上げていくべきコミュニティの在り方をお話ししていただきました。いずれの講演会も、平日夜の時間帯であるにもかかわらず30名をこす参加者にお越しいただき大変盛況となりました。参加者の年代も20代から80代までと幅広く、後半の質疑応答でも活発な議論が行われました。以下簡単ではありますが、講座内容に関してご報告いたします。

薬谷氏の講演では、日本で急速に進行している高齢化の状況を学びました。2060年に高齢化率が40%になる日本は、地方の空洞化の先に首都圏の急激な高齢化が待っています。大都市圏の高齢化は社会的インフラも含めた改革を必要とする大きな問題で対応を急がなくてはなりません。このような現象が起こったことの背景には、戦前は短かった平均寿命が戦後の高度経済成長と生活水準の上昇により極端に伸びたこと。その結果、高い出生率をほこった団塊の世代が突出し、出生率が低下し若い世代と格差の大きいいびつな人口構成がうまれたことがあります。このまま団塊の世代が高齢化していくと、日本社会の70歳以上の高齢者が日本社会の大きな部分を占めるようになり価値観の硬直化が危ぶまれます。一方、ゆとりと郷愁される若い世代は、その印象とは裏腹にチャレンジ精神や柔軟な発想に富み、実際2012年のオリンピックでは新しい競技で多くのメダルを取るなど着実な成果をあげています。世代間の新たなつながりがこれからの日本を豊かにしていくとのメッセージをいただきました。

今回の企画のラストを飾る広井氏の講座では、日本人が本来持っている豊かさ、人とのつながりの在り方について議論しました。日本人の幸福度の低さがよく議論に登りますが、明治に日本にきた外国人の眼には、日本人は周囲の人々とよく調和し明るく朗らかで、幸福な人々に映ったといえます。その幸福度は、近代化と戦後の経済成長重視の価値観のなかで失われていくと思いますが、成長の時代が終わる社会が定常化していく中で見直される時期にきています。近代的な開発や自動車主体の都市設計から、江戸時代のような人々の繋がりや憩いの場としての街づくりへとシフトしていく必要性。また、グローバル化の進んだ現代において、ローカ

ルな文化に興味関心をもつ若者たちがふえている事例などを紹介し、グローバルでありながら地域を大切にす文化が育っていくのではないかとお話でした。

全4回の講座を終えて、少子高齢化の問題の深刻さを改めて実感すると同時に、これからの日本を生きていくうえでたくさんの示唆を得られたように思います。第1回目の長谷川先生には、高齢化社会を哲学的基盤から捉え直し、仕事と育児から解放された自己実現の可能性を提示していただきました。第2回目の山田先生の講座では、一人一人が家族の在り方について率直な意見を交わし深い学びをえました。後半の2つの講座では、より具体的な内容に踏み込んで、コミュニティを土台に若者と高齢者が協働し創意工夫とを重ねていくことが、これからの日本社会を切り開くであろう可能性が見えてきました。講師の方も、参加者のみなさんも非常に強い熱意で講座に臨んでいただき、将来につながる有意義な講座になったと実感しております。

主催ゼミ 大澤ゼミ「社会は何でできているのか」

辻 信行 (理事)

今年度から始まった大澤ゼミは、「社会は何でできているのか」のテーマのもと、全3回に渡って白熱した講義が繰り広げられた。各回のタイトルは、初回から順番に「〈未来の他者〉を考える」、「〈革命の主体〉は誰なのか」、「〈日本社会〉をどう変えるか」。

3回の講義を通して、社会を変えることができるのか、どうしたら社会をその根本から変えることができるのか、という問いを手がかりに、「社会はそもそも何によってできているのか」を考えた。

大澤先生のお話は、縦横無尽に社会のあらゆる現象を具体例に取りながら、それらの間に共通の法則性を見出してゆく。その快刀乱麻な語り口に、参加者の誰もが目ら鱗の心地だった。

なお、この大澤ゼミの内容は、今年夏頃に角川学芸出版社から書籍になって出版されます。詳細が分かり次第、このニュースレターやホームページでお知らせします。どうぞご期待ください。



パネリスト: 渡辺 眸氏



パネリスト: 今福 龍太氏



講師: 大澤 真幸氏
(社会学者・元京都大学教授)

人類の知の遺産 (第VII期) 報告

井上 喜行 (担当・運営委員)

4/14 (土)「コナン・ドイル」
井村 君江 (妖精ミュージアム名誉館長)
シャーロック以後の心霊学研究と「妖精の出現」を中心に、「霧の国」「白衣の騎士団」、オスカーワイルド等との交友関係、霊媒研究、14年間の心霊学普及世界講演旅行、コティングリー妖精事件などについて熱く講演いただいた。質問でウィリアム・ジェームスとのかわりの重要性に言及。



11/10 (土)「朱子」
小倉 紀蔵 (京都大学人間・環境学研究科教授)
「入門 朱子学と陽明学」(ちくま新書) 上梓直前的好機に、こころの変容技法の側面から詳説。井筒俊彦「意識と本質」、木下鉄矢「朱子」らを引き、「敬」(静座)で中庸を当てる、「心は性と情」、「已発と未発」、「知行合一」などの重要なテーマについてわかりやすく講義いただいた。



6/16 (土)「エミール・デュルケム」
大澤 真幸 (社会学者・元京都大学教授)
主要著作「社会分業論」から説き起こし、「自殺論」で幸福と経済成長との関係、連帯、アノミー(無規範状態)など、エヴェレットの「ピダハン」や古市憲寿のピースポート論を引いて興味深い講義でした。特に自殺と連帯の関係をわかりやすく解説していただいた。



1/12 (土)「J・S・バッハ」
柿沼 敏江 (京都市立芸術大学教授)
ジョン・ケージ研究家が、当初の一流鍵盤奏者から「音楽の父」となるまで、メンデルスゾーンのマタイ受難曲蘇演やヘーゲル、ゲーテ、ハイン等とのかわり、ルター派としての至高の存在、全集や協会等について、受難曲を聴きながらお話いただいた。ミュージッキング、現代音楽とバッハなども。



7/7 (土)「井筒俊彦」
若松 英輔 (批評家・シナジーカンパニージャパン代表取締役社長)
「意識と本質」を読む(著者と出会う)ことから、プラトン、漱石、芥川に触れ、東洋・西洋を超えた「東洋」、共時的構造化、实在(死者)が大事で概念(死)はどうでもよい、「神秘哲学」(宗教を超えるのが哲学)など熱く講じられ、質疑で山崎弁栄、河合隼雄、日蓮、内村鑑三などに言及。



2/9 (土)「芥川龍之介」
鎌田 東二 (京都大学こころの未来研究センター教授)
文芸と宗教の流れから、ジョンレノン、遠藤周作との類似、イエイツ、モリス、ケルト、サーガ、との関連、俳句「青蛙…」からはじめ、漱石と鷗外の中間的存在、こころを扱う心理学、宗教、文学の話、「西方の人」(キリスト＝ジャーナリスト論)などヤオヨロズに鎌田節がさく裂した。



9/15 (土)「トルストイ」
沼野 充義 (東京大学人文社会系研究科教授)
没年1910年(大逆事件・白樺発刊)に家出して地方の駅での客死から説き起こし、ロシア正教からの破門、有島武郎「或る女」(アンナ・カレーニナ)や芥川「首が落ちた話」(戦争と平和)との関連、芸術論(バレー批判)、トルストイ主義(無抵抗など)と最高の解説でした。



2012年度は回数が7回になったが、たいへん充実した講師陣により、それぞれの講座が靈性や見えないものの力などで繋がっているように感じた。特に1910年というエポック年、シャーマニズムやアニミズムとの関連をつよく印象づけられた。延べ受講者数は141名。来年度は通し会員が増えるように努めたい。

アートシーン21 ～クリエイティブな世界を切り開く表現者たち～ Part X 長谷川 その (担当・運営委員)

第1回 5/19 「中世の芸能世界―能の向こう側」
中島 渉氏 (作家、評論家、能研究家)
『花と死者の中世』の著者・中島氏に、能についてご講演いただく。執筆の契機は自らの病だったという。そうした話題を端緒に、能が生まれた乱世の時代背景と現代との共通項を照らし合わせながら、能の歴史に埋もれたエピソードや現在に至るまでの変遷を広範囲に語られた。ご自身も能の仕舞や謡を体験され、身体的反応で「高砂」の一部を謡われ、能の世界を臨場感あふれる展開で体現された。病を押してのご登壇だったが、昨秋、旅立たれた。心よりご冥福をお祈りいたします。



第2回 7/14 「歌のちから Part4」
あがた森魚氏 (歌手、シンガーソングライター、俳優)
幅広い世界でご活躍のあがた氏。4回目の講座は根強い支持者を得て終始、会場は熱気に包まれた。前半はトークと歌。ギターを爪弾きながら、静かに近況や「今」を語られた。郷愁を誘う「赤色エレジー」や「キューボラ・ノアールの街」の他、若手の岡本さんと加藤さんを交えてのコラボも。あがた氏が巧みな演奏と歌でリードし、アンサンブルの面白さを披露していただく。質疑応答では母の思い出(『聖なる産声』の著者・山縣良江)や北海道留萌の風景など踏み込んだ質問にも話題は及んだ。



第3回 10/13 「私と銅版画」
山本 容子氏 (銅版画家)
お洒落で自由闊達、大胆な発想と遊び心をもつ山本氏。アーチストは半分以上は職人と語る。30cm内に美しさがある銅版画はラインが命、本の装丁はその延長に。自刻自刷りの工程を映像を交えてご紹介いただく。梅原猛学長当時の京都市立芸術大学時代から、現在に至る40年の創作過程、描く動機、素材選び、作品を生み出す背景と話は尽きない。創作時に浮かんだイメージを表現していくライブ感は圧倒的。音と響きが大切と語り、時には清らかな声でハミングされる。医療とアート、アートインホスピタルの話題にも触れた。



第4回 12/8 「創造の秘密、心身脱落して、水になる、風になる」
横尾 龍彦氏 (日本画家、B・B・K・ドイツ美術家連盟会員)
東京自由大学初代学長の横尾氏。東洋の神秘主義が根底に流れる作品は西洋人に高く評価され、現在もベルリンと秋父を往き来されている。絵筆を持って世界各地を放浪した波瀾万丈の半生。「内なる声に導かれ従う姿勢」を貫いたために芸術家として苦悩の多い道を歩まれたと語る。国内外の創作パフォーマンスの映像を紹介、原風景となっている戦争体験、創作秘話、祈りと瞑想、信仰から生まれる神秘的な体験と芸術表現の関係など縦横に語られた。質疑応答では子どもの無心と芸術家の違いについて的確に答えられた。



第5回 2/16 「入れ墨という身体加工―そのルーツと変遷」
自らの講座をライブと表現される田川さん。よどみない口調で講演が進み、言葉の端々に多次元にわたる鋭い批評＝コメントが盛り込まれる。人類は通かな過去から身体に手を入れ続けてきた。アイスマン、縄文土偶、聖痕……古今東西の入れ墨・タトゥーの歴史とその本質

田川 とも子氏 (神戸女学院大学、京都造形芸術大学他非常勤講師)
を解き、バリエーションをプリントや写真で示された。映像作家の北村皆雄氏、三代目彫よし氏、東京芸大大学院の桐生真輔氏らの参加を得て、質疑応答も熱気に充ち、タトゥーと身体加工に対する想いに溢れた田川さんの人柄や哲学に魅了される時間となった。

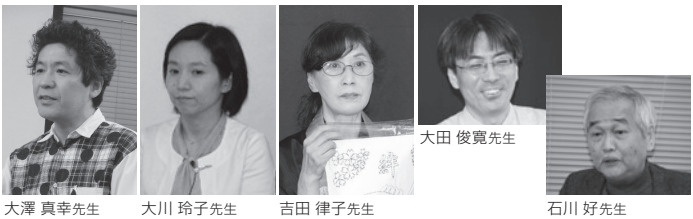


21世紀世界地図総括 ～「視点」を変える～

山口 卓宏 (担当・運営委員)

今年度の5人の先生に共通している点は、私たちがふだん慣れ親しんでいる自分の「視点」を変えることの重要性を強調していることだと思います。現代の様々な閉塞状況を打開するための、確かな手ごたえと示唆をたくさん頂きました。

5/12 (土) 「現代社会をどうとらえるか？」
大澤 真幸先生 (社会学者・元京都大学人間・環境学研究科教授)
現代社会をあえて一言で表現すると、「不可能性の時代」と表すことができる。1974年ころまでの日本は、「理想の時代」であった。つまり「プロジェクトX」的な内容を、日本人全体で共有し、追い求めていた時代であった。その後は、その理想が剥けた時代、「虚構の時代」がしばしば続いた。最後はバブルに酔いしれ、我を忘れた。そして日本人の中にある感覚は、「これではない。あれでもない。常に何かかけている」である。「自民党ではない感覚」が民主党政権を生んだ。そして、「民衆党ではない感覚」が再び自民党政権を生んだ。



6/23 (土) 「『クルアーン』とクルアーンから見た女性」
大川 玲子先生 (明治学院大学準教授)
イスラーム教の信者は、全世界で約11億人存在するといわれている。キリスト教について、世界第2位の信者数である。日本に滞在するイスラーム教の信徒も増えてきた。にもかかわらず、日本人はイスラーム教についてほとんど何も知らない。『旧約聖書』では、神は最初にアダム(男)を作り、そしてアダムの肋骨からイブ(女)を作ったと述べられている。また、蛇(悪魔)に最初にそそのかされて、禁断の実を食べたのはイブ(女)であるとも述べられている。男性優位の論調である。しかし『クルアーン』では、男も女も同じ魂から作られ、禁断の実を食べたのも、男女同時に食べたと述べられている。『クルアーン』には、男女を区別する表現はあるが、男女を差別する表現は存在しない。

7/21 (土) 東日本大震災と傾聴ボランティア―岩手県大槌町の現場からの報告
吉田 律子先生 (真宗大谷派僧侶・サンガ岩手代表)
まさに現場からの報告でした。家族を失った90歳のおじいさんのお話。そのおじいさんは、自分が生き残ったことに、自責の念と罪悪感を強く持っていたそうです。でも手芸を覚えて、「生きていてよかった」と思えるようになったとのこと。おじいさんの「前向きに絆と書いて今日を生き、身の丈のしあわせで好し」という心境を、お話をいただきました。「身の丈のしあわせで好し」、最後はやはり、この境地在「人間の精神の立ちどころ」なんだろう。

2012年度 ボディーワーク・身体探究

鳥飼 美和子 (理事・運営委員長)

2012年度の「ボディーワーク」は、恒例となった奥湯河原の白雲の滝での滝行を7月と9月に行ない、不順だった天候も当日の朝になると不思議に回復し、瑞々しい山の気を満喫しつつ、充実した体験となった。
「身体探究」の講座は、年間テーマを「生命観の転換～医療は変革するか」と題し、二人の医師に登場いただいた。
一回目は長谷川敏彦氏(日本医科大学教授・医療人類学・医学哲学)による「生存転換から観る未踏高齢社会……身体、人生、家族、列島そして医療の探究」(4/28)。超高齢社会を迎える日本の問題を総合的多面的に分析、ケーススタディーで具体的に考え、さらに日本の未来のための「生存転換」を提唱された。この問題は、特別企画「少子高齢社会の未来図」に引き継がれ、東京自由大



4月28日講師：長谷川 敏彦氏

学の取り組むべき大きなテーマともなっている。
二回目は矢作直樹氏(東京大学大学院医学系研究科医学部救急分野教授)による「体と魂の声を聴く～救急医療の現場から」(10/27)。矢作氏は2011年に『人は死なない』という本を出版され、東大病院の現代医療の最前線にしながら霊性や超常現象を考察されている。矢作氏の2度にわたる高山からの滑落体験からはじまった様々な体験を語ってくださった。矢作氏の明晰な語り口とその瞳にすべき内容で、生死の問題、人間の存在の不思議にさらなる興味を与えてくれた。
既存の医師のイメージを超越したお二人の活躍に、あらたな生命観の幕開けが予想された。



10月27日講師：矢作 直樹氏

スピリチュアルデザインーコンテクストデザインワークショップ総括 2012年度 上林 壮一郎 (デザイナー・運営委員・担当講師)

今年のテーマは、ある状態から別の状態へ徐々に変化するという異なる位相をつなげる方法としての「グラデーション」であった。一昨年度のテーマ、異なる位相のものが響き、同時に重なるという「二重性」の展開でもある。
「彼岸と此岸のグラデーション～うつりかわりの造形の魅力と深み～」6月24日(日)
少しずつ形の変わる直方体を並べるとそこに曲面が見えてくる。白スプレーで半分塗装したナイフを白い壁の前に置くと雪景色のように、応挙の幽霊図のように、物体が背景から現れる感じになる。童という漢字から老と言う漢字へ等高線のようにつながて行く。童と老をつなぐ地形が浮かび上がる。どのグラデーションも目を惹きつける魅力があると同時に異なる位相を繋いでいるのだ。それまで断絶していたかのようにみえた二つの位相が、こうした表現によって関係づけられ接続される。今回の気づきは、接続しているという機能性ではなく、その姿こそが美しいという



ことだ。これを彼岸と此岸、あの世とこの世をつないでいるのがまさに、人生という名の「成長」や「老化」というグラデーションであるとみるのは飛躍しすぎだろうか。
「グラデーション・トイー粗さから滑らかさへと変化する木のおもちゃ～」10月14日(日)
東京おもちゃ美術館の協力で、親子を対象としたワークショップを開催して三回目となる。昨年度の木というテーマに続き今年も素材は木だが、テーマはグラデーション・トイである。木の枝を削ってダーツを作るのだ。樹皮のついた枝から、細く滑らかに尖った先端へとグラデーションでつなげる。枝で作ったダーツだから、エダーツ。的は段ボールを綺麗に重ねて作った。枝を削って鉛筆を作るワークショップはよくあるが、これはもうただ削るだけ。それだけなのに枝は次第に刺さるという機能を実験させる。削って尖らせるということがいかに道具の本質に迫る行為か。美しく滑らかなグラデーションのダーツほどよく機能するのだ。私たちはもう一つ、削った枝を刺すバランスゲーム、RENCONを作った。エダーツが、動のおもちゃなら、RENCONは静のおもちゃだ。
*グラデーションに関するより詳しい考察は、2013年度発行のモノ学・感覚価値研究年報をご参照ください。